令和6年度　府立清明高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）　実施段階

学校経営方針（中期経営計画）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
「自分を知り、人とかかわり、ポジションをとる人」を育成する。 そのために、 1　生徒に自信を返す。 2　安心して失敗できる環境づくりを推進する。 3「教え込む教育」から「引き出す教育」への転換を図る。	1　オンデマンドの活用や自由進度学習の試行、総合的な探究の時間の充実などにより生徒の学習意欲が高まった。今後は生徒が主体性を発揮し、学ぶ楽しさを実感できるためのさらなる工夫が求められる。 2　学校行事の内容の充実や地域連携の取組、ワーキンググループの活動の継続等により学校生活への積極的な参画が見られた。今後も主体的・協働的な活動や社会参画の機会の充実を図ることが望ましい。 3　新しいタイプの教室やチルスペースの整備等により、学習者起点による学校の魅力化が進んだ。 4　服装規定の改訂等により、個々の生徒に応じた指導の充実を図ることができた。今後もあらゆる教育活動のユニバーサルデザイン化に向け、外部連携や校内研修をより発展的に推進していくことが求められる。 5　持続可能な教育活動を実現するため、長時間労働の縮減が進んだ。「働きやすさ」や「働きがい」を感じつつ、健康や精神的な充足感を得られる職場づくりの継続が求められる。	1「学ぶ楽しさ」を提供するため、指導と評価の工夫改善や授業のデジタルトランスフォーメーションのための研究・実践を進める。 2　サードプレイス（家庭でも学校でもない場所）の活用と探究活動の導入を発展・充実させ、生徒の主体的・協働的な活動や社会参画の機会を増やす。 3「生徒をリスペクトする」という信念を共有し、内外の評価を活用しつつ、学習者起点による学校の魅力化を図る。 4　教育活動のユニバーサルデザイン化に向けた本校ならではの手法を研究・実践する。 5　ダイバーシティとワークライフバランスに係る取組を進める。

領域	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
組織・運営	学校の魅力化に係る校内組織の活動の充実	教科・分掌横断的な会議であるシン・会議を中心に、若手教職員による新しい発想を活かした事業の展開、デジタルトランスフォーメーションの推進、ティーチャーズバイブルの内容の充実を図る。	A	A	A	10周年記念行事として、記念誌の発行、記念講演会の実施、記念品・寄贈品の作成や選定を行った。また、完全下校時刻の変更や職員室のフリーアドレス化・休息スペースの見直しに取り組んだ。デジタルトランスフォーメーションについて、令和7年度の学校DX化事業に向けて、現在準備を進めている。ティーチャーズバルブルの実践編については、見直しや追加項目を検討したが、大きな変更は無かった。
	DE&Iの実現のための環境整備の促進	生徒や教職員の多様性を尊重し、包括的な学校文化を育成するため、DE&Iについての調査・研究を進める。	A			10月4日にDE&Iフロンティアキャンプを実施した。本校の教職員、希望生徒の他、オンライン参加を含めると110名を超える教育関係者が参加した。先進的な取組の紹介や生徒を含めた意見交流、フロントランナーからの助言をいただいた。チルスペースとして新たにフレックス教室2を整備した。チルグッズは追加購入し生徒へレンタルする取組を行った。
学習支援	個別最適な教育の推進	自由進度学習とオンデマンド授業の拡大を図る。 ・推進期間を設け、全科目・講座で実施する。 ・次年度は完全に個別最適学習を行う科目を設置し、次年度『科目案内』に個別最適学習実施科目と記載して、受講登録を行う。	B	B	B	目的や意義の確認、推進期間の設置等、学校全体で取り組んだことで、全教職員が多くの授業で自由進度学習、個別最適な学習を行えるようになった。 次年度完全に個別最適学習を実施する科目の設置には至らなかった。
	学ぶ楽しさの提供	通信教育実施による学習方法の多様化と探究的な学習の深化を図る。 ・通信教育の試行に取り組む。 ・時間や場所に縛られず、より主体的・探究的な活動ができる学習内容を教科主任会議や研修等で検討する。	A			不登校生徒等を対象として、通信教育を一部の授業で、期間を限定して実施した。それらを導入することで、不登校生徒等に対して、より登校しやすい環境が整備された。
生徒支援	DE＆Iの態度の育成	生徒がお互いの事情を尊重・承認し合い、他者に配慮することができる態度を育てることができるよう、DE＆Iを念頭に置いた生徒主体の各種行事やイベントの企画・運営を行う。	B	B	A	生徒会やワーキンググループ、各種実行委員会において、生徒が主体的に行事やイベントを企画・運営するための支援をすることがができた。また、その際にDE＆Iの視点をグラウンドルールとして提示することで、すべての生徒が参加しやすいルール・環境づくりをする姿勢が見られるなど、他者に配慮をする態度の育成に寄与することができた。
	学習者起点による学校の魅力化	生徒会、清明ワーキンググループのアンケートや対話を通して、校則や授業、施設・設備面等における生徒の困りごとを把握する。また、生徒・教員・保護者等が協働して多角的な議論・検討を行い、「よりよい学校づくり」を推進する。	A	A		年6回のワーキンググループ定例会、3回のアンケート、また生徒を講師とした教職員研修会や授業の困りごとについて対話をするイベントを実施し、生徒の困りごとについて把握した。体育の授業における体操服以外の運動服が緊急時のみ着用可、弁当業者に軽食を導入してもらうなど、「よりよい学校づくり」を推進することができた。

領域	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
進路支援	進路学習のDX化	LHR進路学習や各種進路ガイダンスの説明動画を作成し、オンデマンド化を進める。	A	B	B	進路別ガイダンスでは進路別に作成した説明動画を生徒は主体的に選択して視聴することができた。説明動画についてはTeamsに保管し生徒の必要に応じて提供できる状況とした。各種ガイダンスのオンデマンド化をさらに推進する必要がある。
	進路に係る情報発信の充実	TeamsやXを活用して、進路についての情報発信を行う。	B			Teamsには大学や専門学校のオープンキャンパス情報や各種進路イベントの案内を、Xやインスタグラムには進路学習、職場見学、分野別説明会など生徒の活動の様子を計画的に配信することができた。生徒や保護者のニーズに合った進路情報を提供していくための方法を検討していく必要がある。
教育相談	多様な生徒が安心して生き生きと過ごせる環境の整備	情報共有のしくみを生かし、介助員やスタディアシスタントと円滑に連携する。	A	A	B	ミーティング等で毎日情報を共有することで、介助員を初めとする様々な職種の方々と迅速かつ円滑に連携し、多様な生徒が安心安全に、いきいきと学校生活を送れるよう、環境を整えることができた。また教職員が適切な態度で生徒と関われるよう、特別支援教育コーディネーター・スクールカウンセラー・養護教諭等から、情報を発信したり、直接提供したりすることができた。
	「生徒をリスペクトする」という信念を教員間で共有	ティーチャーズバイブル（実践編・資料編）等で発信する。	B	B		
総務企画	生徒主体の広報活動の充実	広報ボランティアによる、生徒の視点からの投稿を始めとして、動画やマスコットキャラクター「つばめい」を含む広報関連の作品や活動を積極的に広く公開し、本校の取組に対する関心を高めるためのユニークな広報活動を展開する。	B	A	A	Instagramを新たに開始し、Xを上回るインプレッション（いいね）を得ることができ、効果的な広報活動に取り組めた。双方向型オンラインイベント「つばめラジオ」は2回実施し、視聴者とリアルタイムな受け答えにより生徒目線で本校の魅力を発信できた。また、広報ボランティアで作成した動画を、つばめラジオやオープンキャンパスで上映し、広く公開できた。清明WGでの取組について、他校にはない清明らしい探究活動の外部発表を行うことができた。 　生徒リポーターによる投稿が、固定メンバーとなっているので、来年度はより頻繁な情報共有（閲覧数等）や年度途中でのボランティア募集など、活発な広報活動に取り組みたい。
		YouTubeライブ等を活用した、双方向・対話型の交流イベントを複数回企画し、生徒・教職員・参加者の交流を通して、本校の魅力をダイレクトに発信する機会を設定する。	A			
	AIによる授業改革・業務改善	生成AIやAIアナウンサーを活用した授業改革や業務改善の方法を試行・研究し、教職員が授業や業務のDXを進める中で効果的に活用できるように情報を共有する。	B	B		いくつかの試行的な取組を実施した。生成AIによる教材作成の補助や、AIアナウンサーを活用した音声素材の作成、文章校正などを行った。活用方法や課題について一定の知見を得ることができたが、一方で、まだ試行的な段階に留まっており、校内全体への普及や効果的な活用方法の確立には至らなかった。今後は、より具体的な成果に繋がるよう、実践規模の拡大や効果検証、活用促進を重点的に行う必要がある。また、次年度以降は生徒が生成AIを利用する活動も取り組めるようにしたい。
	読書活動を支援し、主体的な学びを支える学校図書館運営	学校生活の中での居場所としてだけでなく、探究活動や自主的・主体的な学びを支える「学習・情報センター」としての機能の充実を図る。	A	A		教科等の要望も反映した蔵書整備を進め、さまざまな授業や課題で図書館・図書資料が積極的に活用された。その結果、授業時間外でも自主的に図書館を活用し学びを深める生徒の姿も見られるようになった。今後、多様な知的好奇心に対応するため、更なる蔵書の充実やデジタル資料・教材の活用を図り、より利用しやすい環境を整えていきたい。
年次	F年次 学びやすい環境の提供	登校しやすい環境を作るために、多様な生徒の実態を加味し、総合的な探究の時間や特別活動、フレスタ等の授業の参加形態や取り組み内容を工夫する。	B	A	A	様々な活動で参加形態を希望制としていたため、自分が参加しやすい場所を選択し参加できた生徒が多かった。一方で様々な活動を用意していたため、活動の時間的な余裕が無くなり、慌ただしい一年になった。
	M年次 自己認知の醸成と多様な学習機会の提供	特別活動や総合的な探究の時間、学校行事等において、自分の個性や獲得した知識・技能を生かしつつ、人と協働しながら取り組む活動の機会を設定する。	A			校外学習やつばめ祭などの取組は、内容選定、取組方法、役割分担などを生徒自身による選択・決定となるように設定の工夫を行うことで、自分の得意を生かし、生徒同士が協働する、主体的な活動につなげることができた。
	S年次 自分の役割をみつける機会の提供	学校行事やフレスタプラス、LHRを通して、地域の人に関わることにより、多様な考えに触れ、積極的に社会に関わる機会を設定する。	A			新大宮商店街のPR動画作成や商品販売を通して、生徒自身ができることを発見し、自ら地域に関わることができた。また、商店街で働く方との交流により職業観や勤労観を育む機会ともなった。
	G年次 希望進路を実現するために挑戦する力の育成と支援	これまでの学校生活で獲得した力を生かし、様々な場面において挑戦を促しつつ、希望進路を実現するための情報提供を通じてきめ細やかな支援を行う。	B			進路支援部をはじめ関係する教職員と連携し、担任による面談や支援等きめ細やかな情報提供を行ったことで、多くの生徒が希望進路を実現することができた。進路未決定生徒への具体的なアプローチが達成できなかった。
事務部	学ぶ楽しさを実感し、安心していきいきと学べる教育環境の整備	教科分掌と連携し、生徒1人1人が落ち着くことができる環境の整備やICT機器等の設備更新を行う。	A	A	A	各教科分掌や清明ワーキンググループ、シン・会議等と連携し、教室プロジェクターの更新やチルグッズの購入等必要な環境整備を行った。次年度以降も連携しながら、あらゆる生徒が安心して学校生活が送れるよう、計画的な環境整備に努める。

（評価の基準　A：十分達成できた　B：ほぼ達成できた　C：あまり達成できなかった　D：ほとんど達成できなかった）

学校関係者評価委員会による評価	・生徒や保護者対象の「学校満足度アンケート」の結果と照らしても、年度当初の学校経営計画に沿って、十分成果を出せていると思われる。 ・生徒の主体的・協働的な取組を推進し、授業や学校行事、学習環境が改革・改善され、生徒がより安心して登校できている様子がみられる。 ・生徒や教職員の多様性を尊重し、包括的な学校文化を育成するため、学校DE&Iの考えが進んでいる。

次年度に向けた改善の方向性	・開校から10年が経ち、次の10年に向けて、さらなる工夫改善によって、本校の教育方針を実現するための取組を発展・推進させていく。 ・生徒たちが主体的に発信・参加できる教育活動を充実させるとともに、生徒の声を聞くことができる機会を大切にし、学習環境の調整を推進していく。 ・ダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョンのさらなる充実を図る。